愛知大学短期大学部生における相談行動の分析（1）
－キャリア支援課、学生相談室、先生への相談の比較－

Analysis of Consultation Behavior of Junior College Students in Aichi University (1)
- Comparison of Division of career support, student counseling room, and teacher -

岡田　圭二
Keiji Okada

要約

愛知大学短期大学部の学生に、キャリア支援課、学生相談室、先生への相談回数、相談することの心理的抵抗感、その原因を評価してもらった。その結果、キャリア支援課への相談回数が多かった。また相談することの心理的抵抗感では、キャリア支援課への心理的抵抗感が低く、学生相談室への心理的抵抗感が高かった。それらの原因として、話を聞いてもらうことになれないという回答が目立った。

1．序

本研究は、愛知大学短期大学部生の相談行動についての調査報告である。短期大学部生の学校生活において、学生は、様々な問題の解決のために、様々な部署への相談を行う。例えば、授業や行事に関して短大事務課への相談、就職活動に関してキャリア支援課への相談、人間関係や個人的な問題に関し

て学生相談室への相談などが挙げられる。また授業や学生生活の全般に関して教員への相談もあるだろう。このような相談行動は、短期大学部生に限らず、学生全般にみられるものであり、学校生活の中で大きな意味を持っている。

しかし、愛知大学短期大学部の学生がどのような相談行動をとっているかについての資料は断片的なものである。そこで愛知大学短期大学部生の相談行動についての基礎的なデータを採集することを目的に、アンケート調査を行った。この時、学校の先生への相談、学生相談室への相談、キャリア支援課への相談について、比較した。また、補助的に、短大事務課への相談の頻度も調査した。

学生の相談の内容として、学業、進路、学校生活などが考えられる。キャリア支援課へは進路の相談が主に行われ、学生相談室へは学校生活に関する相談が行われ、先生には学業、進路、学校生活に関する相談が複合的に行われるのではないだろうか。そしてそれらの相談には、様々な抵抗感が生じていると考えられる。例えば、福島（2011）は、相談をためらう気持ちがあることを指摘してる。愛知大学の短期大学部の学生は、これらの相談に関して、その心理的抵抗感は、どの程度であり、それは何故そのように感じるのであろうか。心理的抵抗感の原因が明らかになれば、その抵抗感に対する対策や制御が行うことができ、学生の相談行動を促すことができるだろう。もちろん、単に相談行動を促すことだけが、学生の将来や成長に帰するものではないだろう。しかし、原因が明らかになれば、教員がサポートを必要としていると見立てた学生に、相談を受ける行動を促すことにより、その学生の適応を健全に進めることもできると考えられる。

2．方法

調査対象者：愛知大学短期大学部生の 37 名であった。平均年齢は、19.3 才であった。年齢の最頻値は、19 才であった。全員が女性であった。

調査日時：2012年1月10日であった。

調査場所：愛知大学豊橋校舎710号教室であった。

調査項目の構成：第1にプロフィール、第2に悩みの種類、第3に相談者、第4に相談内容、第5に相談対象への心理的抵抗について尋ねた。今回の報告では、第5の相談対象への心理的抵抗の部分について報告する。

調査方法：人間関係論2の授業を利用した。授業内での集団アンケートを行った。授業の開始前に、アンケート用紙を配布し、約10分の回答時間の後、回収を行った。

3．結果

今回の報告では、相談対象の心理的抵抗について報告する。相談対象として、先生、学生相談室、キャリア支援課を取り上げた。

3－1．相談回数

相談回数は、表1にあるように、短大事務課が最も多く、先生が最も少なかった。これは「これまでに何回くらい、相談に行きましたか」であった。なお、ここでいう「これまでに」というのは、1年生の場合4月から1月の10ヶ月間、2年生は約1年10ヶ月となる。

表1．各相談対象毎の相談回数の平均

	キャリア支援課	学生相談室	先　生	短大事務課
平均	2．6	0．2	1．6	4．5

短大事務課への相談件数が最も多く、ついでキャリア支援課、先生、学生相談室の順となる。

次に年齢毎に各相談部署への平均相談数を算出した。18才と20才を比較すると、18才では短大事務課が多く、その後、20才ではキャリア支援課が多くなる。なお、複数の20才以上の学生からの回答もあったが、該当者が

少なく、場合によっては個人が特定される可能性があるため、表には記載しない。

表2. 各相談対象毎の平均相談回数

年齢	キャリア支援課	学生相談室	先　生	短大事務課
18	1.3	0.5	0.0	2.0
19	2.9	0.2	2.0	5.5
20	2.0	0.0	0.3	1.0

3－2．相談の抵抗感について

キャリア支援課、学生相談室、先生に対する心理的な抵抗感を「まったくない、すこしある、まぁまぁある、強くある、非常にある」の5段階にて尋ねた。各選択肢の回答数、表3である。

特徴的な結果として、（1）キャリア支援課に相談することの心理的抵抗感が低い学生が多いこと、（2）学生相談室に相談することの心理的抵抗感を強く感じる学生が多いことが挙げられる。

表3．相談することの心理的抵抗感についての回答数と比率。

	まったくない	すこしある	まぁまぁある	強くある	非常にある
キャリア支援課	4 (17%)	12 (50%)	4 (17%)	3 (13%)	1 (4%)
学　生相談室	1 (4%)	11 (39%)	8 (29%)	4 (14%)	4 (14%)
先　生	2 (4%)	11 (39%)	10 (29%)	3 (14%)	2 (14%)

注：括弧内は比率である。なお37人の被調査者全員がこの心理的抵抗感に答えたわけではない。そのため回答のある部署、ない部署などがあったため、回答数を合計しても37人にならない。

3－3．抵抗感の原因となる要因について

キャリア支援課、学生相談室、先生に対する心理的な抵抗感の原因となる要因について、影響の程度を5段階で評価をしてもらった結果が表4である。なおこの評定値は順序尺度であり、本来ならば平均を計算できないが、便宜的に各評定値間の間隔が等しいものと想定して平均値の計算を行った。いずれも数値が大きいほど、その影響の程度が大きいと被調査者が考えている。

3つの相談対象の間で極端に評定値の違うものは見受けられない。ただし、（1）キャリア支援課が「秘密を知られたくない」評定値が低い、（2）キャリア支援課「話をきいてもらうのになれていない」の表定値が低いといったところが目立つ違いではないだろうか。

表4－1　各相談対象毎の心理的抵抗感の原因となる事柄の平均評定値

	信頼できない	秘密を知られたくない	能力がないと思われたくない	説教くさいのはいや	話を聞いてもらえない	弱いと思われたくない	話をきていもらうのになれていない
キャリア支援課	2.5	2.7	3.1	3.2	2.6	2.6	3.3
学生相談室	2.6	3.2	2.9	3.2	2.5	2.7	3.8
先生	2.7	3.3	3.2	3.2	2.8	2.9	3.7

注：評定は5段階評価であり、1が弱く、5が強い。

次に、評定値の最頻値を集計してみた。とくに目立つパターンとしては、（1）キャリア支援課に関して「能力がないと思われたくない」という評定の4が最も多い、（2）学生相談室に関して「弱いと思われたくない」という評定のうち1が最も多かった。（3）先生に「話をきいてもらうのになれない」という評定のうち5が最も多いというところが挙げられる。

表4－2　心理的抵抗感の原因となる事柄の評定値の最頻値とその個数(個数)

	信頼できない	秘密を知られたくない	能力がないと思われたくない	説教くさいのはいや	話を聞いてもらえない	弱いと思われたくない	話をきていもらうのになれていない
キャリア支援課	2 (15)	2 (11)	4 (12)	3 (15)	2 (13)	3 (10)	4 (13)
学生相談室	3 (13)	3 (11)	3 (14)	3 (15)	2 (14)	1 (9)	4 (14)
先生	2 (12)	3 (10)	3 (13)	3 (16)	3 (12)	3 (12)	5 (10)

注：評定は5段階評価であり、1が弱く、5が強い。括弧内は個数

これらのデータ以外にもプロフィール、悩みの種類、相談者などについても回答してもらった。それらについての集計結果は、今後の論文において報告する。

4．結果

まず、相談対象となる部署について、短大事務課がもつとも相談回数が多かった。これは、以前より短大生は短大事務課に行っていろいろな相談をするといわれていたことを裏付ける結果パターンであろう。実際に、成績、学

生生活などに関わる諸問題や相談を短大事務課へ行くことにより解決するようにという指示を学生にすることは多い。

相談対象毎の抵抗感に関する結果パターンをみると、キャリア支援課に対する心理的抵抗感が低いことが挙げられた。これは、キャリア支援課にて行われる就職の相談が実務的な内容であり、学生相談室にて相談される個人の内面的な内容に比べて、相談しやすいということによる可能性が高いだろう。また、この相談内容の相談しづらさということが、学生相談室への相談の心理的抵抗感（敷居の高さ）に通じている可能性が高い。

心理的抵抗感の原因として、学生相談室、先生ともに「話を聞いてもらうことになれない」がキャリア支援課に比べ平均評定値が高かったり、最頻値の数値が高い。このことは、学生相談室での相談が非日常的であったり、短大における先生の位置づけが、高校までとは違い、距離があるように感じられるという学生からの声に一致する。両相談対象ともに、愛知大学の短期大学部生にとって、心理的距離の離れた対象として位置づけられる可能性がある。

これらの結果パターンとその考察から、相談行動の制御に関してできることはなんだろうか。「話を聞いてもらうことになれない」という評定が散見されたことから、相談する姿勢や方法の指示、教育ということの必要性が考えられる。どのように相談するかという方法、問題の解決のために相談するという姿勢に関しての指導が必要ではないだろうか。

引用文献

福島脩身 (2011). 相談の心理学 金子書房